

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 7 日現在

機関番号：32816

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23651261

研究課題名(和文) イングランドの気候地名：語源の考察から始める学際的研究

研究課題名(英文) English place-names with climatic elements: interdisciplinary study beginning with a n examination of etymology

研究代表者

宅間 雅哉 (Takuma, Masaya)

東京未来大学・こども心理学部・教授

研究者番号：60259257

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：日照・日射、風、降水などの気候要素に関連する単語に由来する気候地名は、イングランドではfield-namesと呼ばれる地名に多い。これは、人が家屋敷を構えて定住していない土地、すなわち耕地、湿地、荒れ地、森、林、藪などに与えられた地名である。このfield-namesは、現地の地名研究において年々その重要度を増しており、イングランドの気候地名研究もこれと歩調を合わせて発展し得る可能性を秘めている。

学際性を特徴とする本研究課題は、常に語源の検討という英語学的考察を出発点としつつ、その深化と発展のために、とりわけ気候学的考察、地理学的考察、地質学的考察が必須となることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： English place-names with climatic elements contain words which etymologically mean "bright/ dark," "wet/ dry," "cold/ warm," "summery/ wintry," and "windy." It has turned out that, in England, most of the place-names with climatic elements are so-called field-names, that is to say, the names given to the lands which are not used as habitations, such as arable, pasture, marsh, moorland, wasteland, woodland, and coppice. As the studies on field-names are growing increasingly in England, it is expected that the studies on English place-names with climatic elements can also make progress in accordance with this academic trend.

The studies on English place-names with climatic elements should be interdisciplinary. Beginning with a close examination of etymology of each place-name from the standpoint of the historical study of the English language, it is essential to include, above all, climatological, geographical, and geological points of view.

研究分野：新複合領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：気候 地名 気候地名 イングランド イギリス 英語 語源 学際

## 1. 研究開始当初の背景

日向、日影、風越、雨坪に代表される気候地名の体系的な研究は、我が国では1990年代後半から本格化した。気候地名とは日照・日射、風、降水などの気候要素に関連する文字や単語のついた地名をいう。ドイツ語圏の例では Sonnendorf、Schattenberg、Windhof、Schneeheide 等がこれにあたる。

吉野正敏は『気候地名集成』(2001)で、日本及びアジア、ヨーロッパにおける気候地名の研究史、概要、地域別特徴を論じた。特にヨーロッパの状況については、スイスに気候要素に関する地名を紹介する文献がある程度で、イギリスではほとんど手がつけられていないと指摘している。

そこで筆者は2009年、A.D.Millsによるイングランドの地名辞典 *A Dictionary of English Place-Names* (1998) に収録された地名から、特に語源に着目して、気候要素に関する古語に由来する地名145例を抽出した。そして「日照」「寒暖」「乾湿」「季節」「風」「雪」に関する気候地名の存在を確認した。

イングランド全土におけるこれらの分布状況を調査するために、「日照」に関する地名を「明るい」「太陽」「暗い」を意味する地名、「寒暖」に関する地名を「寒い」「涼しい」「暖かい」を意味する地名、「乾湿」に関する地名を「湿った」「乾いた」を意味する地名、そして「季節」に関する地名を「冬」「夏」を意味する地名に細分して分布図を作成したところ、それぞれが一定の地域性をもって分布することが明らかになった。特に「日照」「寒暖」「乾湿」に関する地名の分布は、それぞれイギリス気象庁 (Met Office) による年間平均日照時間、夏・冬の平均気温、年間平均降水量のデータとの間に相関関係が認められた。

気候地名研究発展の方向性を模索していた2010年には、語源的に「河畔の低地草地」を意味する古語、すなわち古英語 *hamm* 及び古スカンジナビア語 *holmr* に由来する地名と気候地名の関連を考察した。前年の研究がマクロ的であったのに対して、ミクロ的視点から、気候地名研究が内包する諸問題を整理するのが目的であった。

「河畔の低地草地 (water-meadow)」は、河川あるいは小川に面し、雨量の多い冬季には増水のために冠水してしまう草地である。これを踏まえて、「冬季」の部分から「季節」に関する気候地名、及び「雨量」「増水」「冠水」の部分から「乾湿」に関する気候地名との関連の可能性を想定した。

地名の収集は、A.D.Millsの地名辞典 *A Dictionary of British Place-Names* (2003) により、62例を得た。最初にこれら全てについて、英語学的視点から語源と語形成のパターンを詳細に分析した。次にそれぞれの分布地点を白地図上にプロットし、イギリス気象庁のデータによって、全地点の夏と冬の平均降水量を比較した。その上で、もしこれらの

大半が夏と冬の降水量に顕著な差を認め得る地域に分布するならば、「夏季の乾燥に伴う河川の減水」と「冬季の湿潤に伴う河川の増水・氾濫」という観点から、「季節」及び「乾湿」に関する気候地名と関連づけることができるのではないかと仮説を立てた。

研究の結果、(1)「河畔の低地草地」を意味する古語に由来する地名はイングランド南東部、次いで北西部に多く分布し、必ずしも夏に少雨で冬に多雨な地域とは一致しないこと、(2)冬季の降水量にみられる地域差は、山地及び丘陵地をはじめとする地形に左右されること、(3)河川の増水・氾濫は、地名そのものの分布地点よりも、さらに上流部及び水源付近の降水量と、水源となる帯水層を形成する地質を考慮する必要があることが明らかになった。

このような経緯から、イングランドの気候地名研究は、語源の検討という英語学(史的研究)的考察を出発点とし、少なくとも、上記(1)の成果より気候学的考察、(2)の成果より地理学的考察、そして(3)の成果より地質学的考察を含めて、学際的に推進する必要があるという結論に至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の4点である。

(1) イギリス地名協会 (English Place-Name Society) によって1924年以来編纂が続く『イングランド各州地名要覧』(以下、『要覧』) 85巻すべてを精読し、イングランドの気候地名を網羅的に収集する。そして、それによって研究の基盤となる実例のソースを充実させ、エビデンスとなるデータの信頼性を向上させる。気候地名の大半は、日本の町村あるいは字(あざ)に相当する小集落と予想されるので、州単位で地名を収録した『要覧』の使用は、例の総数の飛躍的増大につながるものと期待される。

(2) 収集の進捗状況に合わせて、気候地名の分布図を作成する。イングランド南部、中部、北部の順で、段階的に行う予定である。作成は「明るい」を意味する地名、「暗い」を意味する地名など気候要素に関する意味ごとの分布図を原則とするが、必要に応じて、気候地名と判断する根拠となる古語ごとの分布図作成も視野に入れる。

(3) 古英語 *hamm* が「河畔の低地草地」以外の意味で語源に關与するイングランドの地名をA.D.Millsの地名辞典(2003)から収集し、気候地名との関連をさらに詳しく検討する。この古語は多義的で、「河畔の低地草地」のほか「囲い地」「突起地形」「河川の湾曲部」「島状・谷状地形」を意味するが、これらの語義の背後には、「水辺からの距離」「土地の乾燥度」及び「起伏の有無と程度」という変数を読み取ることが可能である。すなわち、

語源の検討という英語学的考察が、乾湿という気候学的考察、そして地形という地理学的考察の必要性を生み、本研究課題の趣旨に合致する。

(4) イギリスに向けて研究成果を積極的に発信し、現地の地名研究に、気候要素に基づく研究という新たな視点を紹介する。同時に、『要覧』に凝縮されたイギリスの科学的地名研究の手法と成果を積極的に吸収し、我が国の地名研究発展に貢献することを目指す。

### 3. 研究の方法

研究期間初年度の 2011 年度前半は、A.D.Mills の地名辞典 (2003) から古英語 hamm に由来するイングランドの地名を収集し、語源に關与する意味、すなわち「囲い地」「河畔の低地草地」「突起地形」「河川の湾曲部」「島状・谷状地形」ごとに、分布図を作成した。そして、それぞれの分布地点について、hamm の意味、分布地点の立地 (河川からの距離、起伏、標高等) として年間の降水 (乾湿) 傾向という 3 者間に、どの程度まで相関関係が認められるかの検討を試みた。

『要覧』全 85 巻の精読による気候地名の収集作業は、2011 年度後半に開始した。扱う順序については、刊行年順とはせず、地理的な連続性によった。すなわち、まずイングランド南部諸州の『要覧』を東から西へ、次に中部諸州の『要覧』を西から東へ、そして北部諸州の『要覧』を東から西へ順に扱うこととした。これは収集作業の過程で、近隣あるいは周辺諸州の状況と比較しつつ、空間的連続性の中で気候地名の出現と分布の傾向を把握できる進め方が効果的と判断したためであった。また、イングランド巡検 1 回分の踏査対象地域を限定するねらいもあった。

イングランド巡検は、『要覧』の精読による収集作業が完了した州を対象に、研究期間中、計 3 回実施した。巡検には英国政府陸地測量部 (Ordnance Survey) による 5 万分の 1 及び 2 万 5 千分の 1 地形図を持参し、現地の地形・立地・景観等の観察によって、『要覧』の記述内容の確認と補完を主たる目的とした。第 1 回は 2012 年 2 月 22 日から 3 月 5 日の間に Kent、Surrey、East Sussex、West Sussex、City of Southampton、Dorset で実施した。第 2 回は 2012 年 8 月 22 日から 8 月 28 日の間に Berkshire 及び Wiltshire で実施し、第 3 回は 2013 年 8 月 30 日から 9 月 10 日の間に Gloucestershire 及び Devon で実施した。

2013 年 8 月には、それまでに収集した気候地名に関する各種情報の整理と、将来のウェブ公開を念頭に、「イングランドの気候地名データベース」構築を開始した。主な入力情報は地名、所在州、所在教区、『要覧』の掲載ページ、気候地名と判断する根拠となる古語、古形、定義 (語源)、文献初出年、大分類 (例: 「寒暖」「乾湿」等)、小分類 (例:

大分類「寒暖」の中の「寒い」「暖かい」等)、5 万分の 1 及び 2 万 5 千分の 1 地形図上の記載の有無である。

### 4. 研究成果

本研究の成果を、以下に示す 6 つの観点からまとめる。

(1) 『要覧』による気候地名収集について  
『要覧』の精読による気候地名の収集は、イングランド南部及び中部がほぼ完了した。刊行年が新しい『要覧』ほど、以下の(3)の で述べる field-names の扱いが詳細で、気候地名はこの field-names に多いことが明らかになった。

第二次大戦以前の『要覧』では、概して、地域の子供達 (school-pupils) の協力を得て、家庭や近所で言い伝えられてきた field-names を断片的に示す程度だが、戦後の『要覧』では、以下の(5)の で述べる *Tithe Awards* をはじめとする古文獻からこれらを網羅的に収集し、教区 (parish) ごと、特に 2000 年代刊行の『要覧』では、州によっては教区内の町区 (township) ごとに膨大な数を提示している。これは、現地の地名研究において field-names の重要度が年々増していることを物語る証左でもある。今後の気候研究推進にあたって、その動向をしっかりと把握していく必要がある。

研究期間終了時点で、地名の語源に關与し、気候要素に關連する意味を有して、当該地名を気候地名と判断する根拠となる単語は、136 語に達した。内訳は「乾湿」に関する意味を持つ単語 47 語 (34.6%)、「日照・日射」に関する意味を持つ単語 42 語 (30.9%)、「寒暖」に関する意味を持つ単語 21 語 (15.4%)、「季節」に関する意味を持つ単語 8 語 (5.9%)、「風」に関する意味を持つ単語 7 語 (5.1%) である。これらのほか、複数の気候要素を想定すべきものとして、「乾湿」または「風」に関する意味を持つ単語 4 語、「日照・日射」または「寒暖」に関する意味を持つ単語 3 語、そして「日照・日射」または「乾湿」を意味する単語 1 語がある。またこれらとは別に、綴りからのみ判断すれば気候地名のようでありながら、語源的には全く気候要素に關係のない単語 3 語を得た。

上記 で述べた単語については、『要覧』の精読による収集作業が完了した時点で、イングランド北部のもの合わせ、総合的な分析と検証を行う。

(2) Surrey 及び Sussex について

「明るい」及び「暗い」を意味する地名の分布図を比較した結果、双方の分布領域がほぼ重なることが明らかになった。これは、場所によっては、「明るい」を意味する地名と「暗い」を意味する地名が、比較的接近して存在する可能性を示唆している。我が国では、一般に東西に走る谷の北側に日向、南側

に日影という地名が隣接する場合が多いが、こうした関係がイングランドでも見られるかどうかを検討する必要がある。

「乾いた」を意味する地名 2 例、「湿った」を意味する地名 6 例という結果、及びこの 2 州を含むイングランド南東部が、年間降水量という点からはむしろ少ない地域であることを考慮すると、「乾湿」に関する地名の分布地域を、単に降水量の多寡と関連づけるのは困難なようである。今後は現地の土壌や地質の違い、及びそれらの保水性の観点から検討する方がより有益と思われる。

「夏」を意味する地名は「明るい」を意味する地名、「冬」を意味する地名は「暗い」を意味する地名と、それぞれ分布状況が類似することが明らかになった。晴天が多く乾燥する夏、曇天・雨天が多く湿潤な冬というイングランドの気候を考慮すれば、これらの相関関係解明は興味深いテーマである。

### (3) Berkshire 及び Wiltshire について

気候地名と判断した地名の数は Berkshire が 226 例、Wiltshire が 110 例となった。この差は field-names の扱い方の違いによる。field-names とは人が家屋敷を構えて定住していない土地、すなわち耕地、草地、湿地、荒れ地、森、林、藪等に与えられた地名である。1970 年代半ばに刊行された Berkshire の『要覧』は、教区 (parish) ごとにこれらを網羅的に提示しているが、刊行が第二次大戦前の 1939 年となる Wiltshire の『要覧』は、巻末の付加的な扱いにとどめている。これら 2 州で気候地名と判断した地名の 51.5% が field-names であることを考えると、今後は『要覧』の刊行時期にも配慮しつつ、扱いには慎重を期さねばならない。

field-names は、現行の 5 万分の 1 及び 2 万 5 千分の 1 地形図では位置の特定が不可能である。気候要素別の割合では、最小の「寒暖」に関する地名でも 33.8%、最大の「乾湿」に関する地名では 86.6% を占めるため、分布図の作成は見合わせることにした。

Surrey 及び Sussex 同様、これら 2 州においても、「寒暖」に関する地名に「暖かい」を意味する地名が見られない。

Wiltshire 南部では、「冬」を意味する地名が非常に多い。いずれも「冬に最も勢いよく流れる小川」を意味する Winterbourne なる古形を有し、チョーク層の湧水を水源とする点で共通する。すなわち、この地域の夏よりも冬にかなり雨が多いという気候学的条件と、冬の雨を地下水として満たす帯水層となるチョーク層、そしてそこから水の供給を受ける湧水の存在という地質学的条件を反映する地名といえる。

### (4) Gloucestershire について

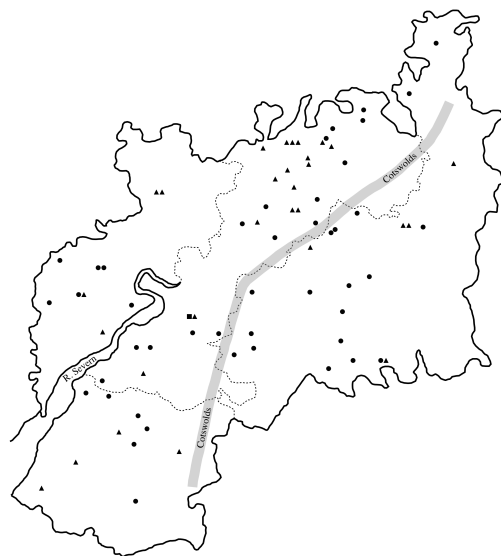
「日照・日射」に関する地名では、「(木々がないかまばらなために) 明るい場所」及び「(草木に覆われて) 薄暗い峡谷」を意味す

る古語 (いずれも再建形) を確認した。これらは、植生の状況が「明るい」あるいは「暗い」をいう認識に影響を及ぼすことを示唆する点で重要である。

Surrey, Sussex, Berkshire, Wiltshire では見られなかった「暖かい」を意味する地名 5 例を確認した。そのうち 4 例は、「(風雨などから) 守られた場所」を意味する古語とその派生語に由来する。いずれも同州東部及び中部に見られ、丘陵地 Cotswolds 周辺という起伏に富んだ地形が関係するものと考えられる。

同州東部から中部そして南西部にかけて、「夏」を意味する地名は漸増傾向、「冬」を意味する地名は漸減傾向を見せる。この問題は、地名の第 2 要素が意味する景観 (例: Winerwell の well 「泉」) に着目して、その使用が可能な季節と不可能な季節という観点から、前項 同様、この地域の気候学的・地質学的条件を加味して検討する必要があると思われる。

同州では、気候地名と判断した地名 354 例のうち 231 例 (65.3%) が field-names であった。今後収集対象となる州でも、『要覧』刊行年が新しいほど、field-names が占める割合は大きくなると予想される。正確な地図上の位置を特定できない以上、分布図の作成は不可能だが、「乾湿」に関する地名を対象に、各 field-names が所在する教区域の中心部を暫定的な代替指標としてプロットし、以下の分布図を作成した。図中の丸は「乾いた」、三角は「湿った」、四角は「乾いた及び湿った」を意味する地名を示す。代替指標による分布図とはいえ、分布傾向を大まかに把握するには十分ではないだろう。



### (5) 巡検について

研究期間中 3 回実施したイングランド巡検では、以下の気候地名及び関連する地名への現地踏査を行った。また 2013 年度には現地公文書館訪問も行い、関連史料を閲覧した。

Kent, Surrey, East Sussex, West Sussex, City of Southampton, Dorset 巡検。2012年2月22日：成田発。23日：ヒースロー着後、ロンドン泊。24日：Sheerness。25日：Summerford Farm, Alderbed Meadow。26日：Summer Hill, Coldthorn Wood, Winterbourne, Falmer。27日：Shere, Winterfold。28日：Dry Hill, Shirley。29日：Hylters, Somerley。3月1日：Winterbourne Abbas, Winterbourne Steepleton, Winterborne St Martin, Warham。2日：Winterborne Tomson, Winterborne Muston, Winterborne Kingston, Winterborne Whitechurch, Winterborne Clenston, Winterborne Stickland, Winterborne Houghton, Winterborne Zelston。3日：ロンドン泊。4日：ヒースロー発。5日：成田着。

Berkshire 及び Wiltshire 巡検。2012年8月22日：成田発。同日ヒースロー着。23日：Dark Copse, Black Wood, Cold Hill。24日：Summerside。25日：Winterbourne Bassett, Winterbourne Monkton, Great and Little Somerford, Great and Little Chalfield。26日：Whatcombe, Winterdown Bottom and Barn, Windmill Hill。27日：ヒースロー発。28日：成田着。

Gloucestershire 及び Devon 巡検。2013年8月30日：成田発。同日ヒースロー着。31日：Cold Ashton, Freezing Hill。9月1日：Brightlands, Drybrook, Serridge Green, Whitecliff。2日：Dimmer's Dale, Blackness, Shadwell, Brackenbury Ditches。3日：Gloucester Archives。4日：Flood, Kennick, Kennford, Kenn。5日：Great and Little Mis Tor, Misdon, Lewdon Farm, Great Haldon。6日：Devon Heritage Centre。7日：Lettaford, Warmhill Farm, Wind Tor, Blackslade Down, Higher and Lower Blagdon, Hulstercombe。8日：Blackborough, Windwhistle Farm。9日：ヒースロー発。10日：成田着。

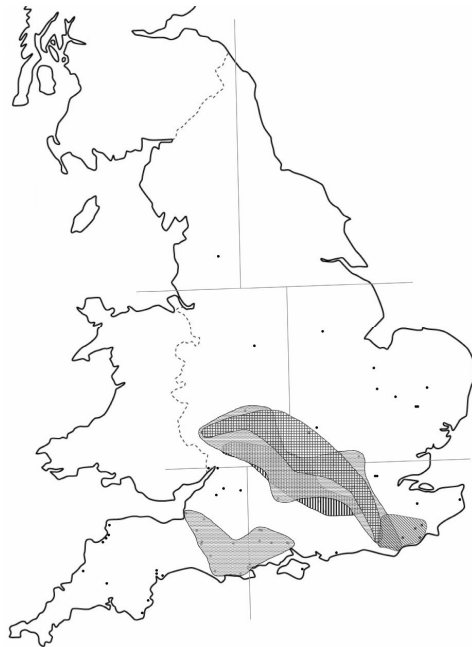
2013年9月6日、Exeter 市郊外の Devon Heritage Centre を訪問し、同州中部に位置する Cheriton Bishop 教区の *Tithe Awards* と付属の *Tithe Award Map* を閲覧した。『要覧』が提示する field-names のうち、比較的最近のもの出典となっている史料である。前者は土地台帳の一種で、教区全域の土地区画ごとの名称、すなわち field-names が記されている。場所は、同一の識別番号が付された区画を *Tithe Award Map* から探し出す。今後 field-names の位置特定は、この区画が位置する地点を2万5千分の1地形図で比定すれば可能となることが明らかになった。

#### (6) 古英語 hamm に由来する地名について

古英語 hamm に由来する地名は、イングランド中部南半部以南に9割以上が分布し、特に南東部と南西部に多い。

「囲い地」「河畔の低地草地」「突起地形」「河川の湾曲部」「島状・谷状地形」と多義

的な古英語 hamm は、これらのうちいずれの意味で語源に關与するかによって、地名の分布状況が異なる。ただし「島状・谷状地形」の場合を除いて、以下の分布図に示す通り、比較的分布が集中する主要分布域が重複することが明らかになった。また hamm が「囲い地」の意味で關与する地名については、南東部南西寄りから南西部東寄りにかけて、L字状を呈する主要分布域を別に持つ。当初は、語源に關与する意味によって地名の分布域がかなり分散する可能性を想定していたが、これに反する結果となった。



上記の結果に鑑み、当初予定していた「それぞれの分布地点について、hammの意味、分布地点の立地（河川からの距離、起伏、標高等）そして年間の降水（乾湿）傾向という3者間に、どの程度まで相関関係が認められるか」の検討には、有意性を期待することが困難と判断した。

残念ながら気候地名との関連を見出すことはできなかったが、古英語 hamm に由来する地名は、文献初出年の新旧によって分布の推移を追跡すると、まず南東部に最初の分布が見られ、続いて中西部、中東部、南西部の順で分布域が拡大する。この推移は、『アングロサクソン年代記』に記されたウェセックス王国の版図拡大史にほぼ一致することが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計4件)

1. 宅間雅哉、イングランドの気候地名：Gloucestershire、東京未来大学研究紀要、査読無、2014、第7号、101-111

2. 宅間雅哉、イングランドの気候地名：  
Berkshire 及び Wiltshire、神奈川大学言  
語研究、査読有、2014、第 36 号、25-43
3. 宅間雅哉、イングランドの気候地名：  
Surrey 及び Sussex、東京未来大学研究紀  
要、査読無、2013、第 6 号、95-107
4. 宅間雅哉、古英語 hamm に由来するイン  
グランドの地名：分布と拡大の推移、山梨  
英和大学紀要、2012、第 10 号、9-40

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宅間 雅哉 (TAKUMA MASAYA)  
東京未来大学・こども心理学部・教授  
研究者番号：60259257

### (2) 研究分担者

なし ( )  
研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし ( )  
研究者番号：